

「訪問者」

— 2 稿 —

2023/11/26

石川

〈人物表〉

山本 浩一 (50)	会社員
女 (27)	会社員
山本 貴子 (47)	主婦
山本 裕樹 (17)	高校生

〈ログライン〉

山本浩一は、家に入り込んだ女を捕まえるが、女は指示されて実行しただけだと白状する。通報せずに女を逃がしてやる浩一だが、すべては女のつくり話だった。

〈ねらい〉

初稿より怖かったか。どこか一部分でも怖かったか。

1. 山本家・外観（夜）

住宅街に囲まれた小さな一軒家。ガレージには車。玄関と二階の部屋に電気が点いている。

2. 山本家・リビング（夜）

廊下とリビングの間にはドア。入ってすぐにキッチン、その先にテーブル。奥には庭が見える。キッチンで洗い物をする山本貴子（47）。ソファーには山本浩一（50）。爪を切っている。

浩一 「（貴子の方を見て）週末どこか行こうか」

貴子 「あの子部活よ」

浩一 「あっそう、大変だな」

浩一、また爪切りに戻る。

と、微かに玄関のドアが閉まる音がする。

浩一、玄関の方を見るが、爪切りに戻る。

3. 山本家・玄関・中（夜）

つま先が玄関扉の方に向いて揃えられた靴。の中につま先がこちら側を向いた靴が一つ。

4. 山本家・リビング（夜）

浩一と貴子、それぞれの作業。

開くドア。入ってくる足。

貴子、横目で何かに気付いて呆然とする。

流れる水の音。

浩一 「お母さん、もったいないじゃ……」

と、振り向こうとしたとき、何かに気付く。

ロングコートで長い髪の女が立っている。

呆然とする浩一と貴子。

女は目を見開いたまま、テーブルまで歩いて来る。

貴子、気にしながら水を止め、出てこようとする。

女 「（低く汚い声）あー」

と、発し始める。

貴子、動けない。

5. 山本家・廊下（夜）

走って来た浩一、勢いのまま女を押し倒す。

と、追いかける。

浩一 「待て」

女、廊下へ進んでいく。

貴子、動けない。

女、出て行こうとする。

女 「では」

女、起き上がって立つと、浩一に笑って、

浩一 「！」

女 「なーんてね」

全身を打ち付ける女。と、

貴子、泣きそうな表情。

全身を大きく床に打ち付ける女。

女 「（うなり声）うー」

痙攣が大きくなり、

浩一、慌てて離れる。

と、突然女の体に痙攣が始まる。

浩一、女を起こそうとする。

浩一 「おい」

目を見開いたまま倒れている女。

浩一、女の顔を覗き込む。

浩一も恐る恐る立ち上がり、女に近づく。

貴子、キッチンから覗き込む。

訪れる静寂。

が、膝をつき、気を失って倒れる。

と、手を伸ばす。

女 「やめ……て……助けて……」

女、頭を押さえながら何かに訴えるように、

胸を押さえて苦しみだす。

女 「ぐ……」

続く女の声。と、

浩一、動けない。

浩一、女の背中に乗り、

浩一 「このやろ」

山本裕樹（17）、階段から降りてきて、女を押しやる。

貴子はリビングから様子を伺う。

必死に抗う女。

浩一 「裕樹、しっかり押さえとけよ」

裕樹 「おお」

女 「違うんです。頼まれたんです。話を聞いてください」

浩一 「何言ってるんだ、こいつ」

と、押さええる力を強くする。

女 「本当です。お金も貰いました。とにかく話を聞いてくだ

さい」

裕樹 「母さん、警察」

貴子 「そうね」

と、電話を取りに行く。

女、抵抗を止め、泣きそうな声で、

女 「待ってください。どうしてこんなことに……」

女を見る浩一。

浩一 「話を聞こう」

貴子 「あなた」

女 「コートのポケットを見てください。一万円あります」

浩一、ポケットを調べる。

取り出されたのは一万円。

女 「いたずらしてこいって頼まれたんです。悪気はなかったんです」

浩一 「いたずら？ 誰に？」

女 「知りません。声をかけられて、前金として一万やるからその辺の家に入ってこいって。自分は外で見張ってるっ

て」

浩一、貴子と顔を見合わせる。

浩一 「本当か？」

女 「はい、ほんとにすみませんでした」

浩一、裕樹に促す。

裕樹、押さえるのをやめる。

浩一も女を自由にしてやる。

女、向き直ると土下座して、

女 「本当にすみませんでした」

浩一 「こういうこと、よくするの」

女 「いえ、初めてです」

浩一 「仕事は」

女 「アルバイトをいくつか」

浩一 「歳は？ 20代？」

女 「27です」

浩一 「27ならしていいことと悪いことくらいわかるでしょ」

女 「はい、すみません」

浩一、ため息をついて、

浩一 「通報はしないから、もう行きなさい」

女 「すみません、ありがとうございます」

と、もう一度土下座。

浩一 「今後、二度とこういうことはするなよ。真面目に生きな

さい」

女 「はい」

浩一 「それで、その見張ってる奴はどこにいるんだ」

女 「すぐ近くにいると思います」

浩一 「ガツンと言ってやらんとなあ」

貴子 「ねえやめて」

浩一 「大丈夫だよ、ちょっと言うだけだから」

と、玄関へ向かう。

浩一 「開けたらいるんだな？」

女 「はい」

貴子 「お願い、やめて」

浩一、玄関のドアを開ける。

6. 山本家・玄関・外（夜）

浩一、出てくる。

辺りを見回す浩一。

仕事帰りのサラリーマンが歩いている。

女も出てくる。

浩一 「あれか？」

女 「違います。もっと大柄でした」

浩一、再び辺りを見るが、

浩一 「多分君は騙されたんだ。その男にとっちゃ君に渡した一万円なんかどうでもよかったんだろう」

女 「はあ」

浩一 「とにかく仕事を頑張って、真面目に生きることだな」

女 「はい」

浩一、門を開け、

浩一 「じゃあ」

女、小さく頭を下げ、出て行く。

浩一、門を閉め、家の中へ入る。

7. 山本家・リビング(昼)

浩一、テレビを見ている。

貴子、来て、

貴子 「ねえ、これ」

と、小さな封筒を差し出す。

封筒には『山本家 ご主人へ』とある。

貴子 「何かしらね」

と、去っていく。

浩一、テレビを消して、中を確認する。

中にはお金と手紙。

浩一、お金を数える。五万円。

慌てて手紙を読み上げる浩一。

浩一 「昨晚はお邪魔いたしました。大柄の男は私のつくり話で
ございます。このお金は私の給料のほんの一部ではあり
ますが、どうぞお使いください。では」

浩一、五万円を見る。

(了)